

狂言公演にあたって—小笠原弘晃 狂言とは — 700年続く“人間讃歌”の芸能

狂言は今からおよそ700年前、室町時代に誕生した庶民の喜劇で、能と合わせて「能楽」と呼ばれています。

シンポジウム後のレセプションでは、狂言師 小笠原弘晃氏および野村万之丞氏によるパフォーマンス「寝音曲（ねおんぎょく）」が披露され、会場は喝采の拍手に包まれました。









狂言とは — 700年続く“人間讃歌”の芸能

狂言は今からおよそ700年前、室町時代に誕生した庶民の喜劇で、能と合わせて「能楽」と呼ばれています。能が古典的題材を扱い、幽玄の美を追求する悲劇であるのに対し、狂言は日常の出来事を笑いに昇華する、明るく祝言性の強い喜劇として受け継がれてきました。

とはいえ、狂言は単なる“お笑い”ではありません。人間の喜怒哀楽、弱さや愚かささえも丸ごと受けとめ、その中にある可笑しみを発見して笑い飛ばす—まるで人間そのものを讃える芸能です。

狂言の演技は無駄を省き、明朗で力強く、舞台装置や幕に頼らずとも成立します。小道具も必要最小限。観客は役者の身体表現を受け取りながら、自然と想像力を働かせます。セリフは中世口語、装束は当時の姿を忠実に再現し、小謡や舞には室町時代の流行歌が息づいています。古典芸能でありながら、どこか懐かしく、現代人にも親しみやすい理由がここにあります。

狂言が描くのは、人間の“等身大”

狂言のテーマは、日常のごく身近な出来事です。

- ・ 主人の命令を避けようとして、つい嘘をつく召使い
- ・ 欲に負け、人の物を盗んでしまうお坊さん
- ・ 好き合っているのに素直になれない男女

どれも、私たちのすぐそばにありそうな話ばかり。

狂言はこうした人間の弱点や可愛らしさに光を当て、「まあ、人間なんてこんなものだよ」と、明るく肯定してくれます。

だからこそ私は、狂言は日本だけの文化にとどまらず、世界中の誰もが等身大の自分を重ねて楽しめる芸能だと思っています。

実際、「人間の普遍的なシチュエーション」を扱う狂言の演目は、現在**254曲**も伝わっています。
新作を作ろうとすると、固有名詞が変わるだけで、結局は昔の演目とよく似た構造になることが多い—
つまり、**700年前から人間の本質は変わっていない**のです。
国や時代を越えて。

温故知新の時代に、狂言ができること

日本には「温故知新」という言葉があります。“古きを理解することで、新しいものが生まれる”という意味です。

現代は、AIをはじめとした新しい技術が驚くべき速さで進化し、私たちの生活や価値観を大きく変えつつあります。
しかし、私は決して「**狂言がAIより優れている**」と言いたいわけではありません。

むしろ、古典芸能が育んできた“人間理解”と、AIがもたらす新しい可能性が、
互いに補い合いながら発展していく未来を望んでいます。

AIが得意とする領域と、狂言が寄り添ってきた人間の心。
それぞれに価値があり、その両方がこれからの社会を豊かにするはずです。

狂言が700年以上も途切れることなく続いてきた背景には、
「人間の本质は普遍である」という確かな実感があります。
だからこそ、狂言を通じて世界の人々が“自分たちは同じ人間だ”という感覚を共有し、
互いを認め合える未来につながってほしい。
私は一人の芸人として、そう願いながら舞台に立ち続けています。

狂言《寝音曲》－ 解説

『寝音曲（ねおんぎょく）』は、主人と太郎冠者の軽妙なやりとりを軸に、“人間くささ”と“愛嬌”がたっぷり詰まった狂言の名作です。

ある夜、ご主人がふと召使い・太郎冠者の部屋の前を通ると、どこからともなく見事な謡の声が聞こえてきます。

翌日、主人は太郎冠者を呼び出し、「さあ、あの歌を謡ってみよ」と所望します。

ところが太郎冠者は、「いえいえ、あれは私ではありません」と、しらばっくって嘘をつきます。

主人がしつこく求めると、今度は「酒を飲まないと声が出ません」

と言い訳をし、さらに酒を飲むと、「妻の膝を枕にして寝転べば謡えるのですが、座っては声が出ません」と、次から次へと逃げ口上を重ねます。

ついに、ご主人は自分の膝を差し出し、太郎冠者は主人の膝を枕にして謡う羽目に…。

立場は上下の主従でありつつも、そこに漂うのは、どこか不思議な温かさと可笑しさです。

厳しさの中にも情がある主人、不器用で素直になれない太郎冠者。

この二人の関係性こそ、狂言の魅力そのもの。

また劇中で太郎冠者が謡う曲は、700年前・室町時代の流行歌としての“謡・舞”の名残であり、狂言に息づく“歌舞音曲”の風雅を感じていただけます。

25分ほどの小品ですが、物語が進むほどに可笑しみが増し、ラストに向かってどんどん面白くなる構成です。どうぞ最後まで、人間の弱さと愛らしさが交錯する、古典喜劇の妙味をお楽しみください。